



一庫の里山景観

第62回テーマ： 六甲山で 生き物と出会う

講演内容

- 人と自然の共生の歴史
- 人里と鎮守の杜：日本人の宗教心
- 地球温暖化と生物多様性

実施日：平成20年5月17日（土）

午後1時～3時45分

場 所：六甲山自然保護センター



講師：岩槻 邦男さん
プロフィール

1934年丹波生まれ。京都大学教授、(社)日本植物学会会長などを歴任。現在、東京大学名誉教授、ユネスコ国内委員会自然科学小委員会委員長など。平成19年文化功勞者。

第6期の活動がスタート

この日の六甲山は晴天に恵まれました。気候は涼しく、新緑がまぶしい爽やかな六甲山でした。

午前中は「活用する会」の平成20年度総会を開催しました。平成20年度はこれまでの活動に加えて、六甲山での環境学習・生涯学習をさらに促進し、会員数300名を目指した募集活動をするなどが承認されました。



総会の参加者で記念撮影

岩槻さんは日本を代表する科学者

市民セミナーは、人と自然の博物館の館長の岩槻館長を講師にお迎えしました。岩槻さんは日本の植物学者の重鎮で、日本の生物多様性国家戦略の策定にも関わっておられる方です。非常にご多忙の中、セミナーにお越しいただきました。

里山のコンセプトや生物多様性について分かりやすくお話しいただきました。質疑応答にも1時間以上お応えいただき、内容の濃いセミナーになりました。

日本の「里山」は地球継続性の大事なコンセプト

市民セミナーでは、里山は自然破壊の残滓であり、言葉の定義上の「自然」ではない。日本の里山は奥山と人里をつなぐバッファゾーンであり、人

里・里山・奥山での住み分けで、人と自然の共生ができてきた。「人と自然の共生」は日本人なら誰でも理解できる概念だが、それは日本人の自然に対する畏怖の気持ちに根ざすもので、世界共通のものではない。地球の継続性にとって、この概念を広めることは重要だとお話されました。

六甲山を活用しなくちゃ「もったいない」！

岩槻さんから、当会のキャッチフレーズ「六甲山をたのしまなくちゃもったいない」の「もったいない」には、八百万の神から与えられた環境を無駄にしないという意味がある。とお話いただきました。

六甲山での活動は地球上の小さな1点での活動ですが、この環境を有効に活用することは、地球の継続性にも繋がっていくのだと勇気づけられました。

※詳しくは、1、2ページをお読みください。

参加の感想 井上 佳幸さん

私には人生の目標があります。それは、「全世界に大きな木を植え森を創り、人々に快適を提供すること。」です。そこで、今回ある人に紹介してもらい参加しました。

色々と学ばせて頂きましたが、一番大きく心に残ったのが自然の意味でした。自然という言葉のもつ意味が、最も私のふに落ちました。最後に講師の岩槻さん、私に今回のセミナーを紹介してくれた方、会場や六甲山に感謝！



主催：六甲山自然保護センターを活用する会

協力：兵庫県立人と自然の博物館

後援：兵庫県神戸県民局 灘区役所 神戸市教育委員会

【助成金をいただいている機関】

コベルコ環境保全基金、

公益信託自然保護ボランティアファンド、

公益信託TAKARAハーモニストファンド



第62回テーマ：六甲山で生き物と出会う



第62回市民セミナーの流れ

市民セミナー

1. あいさつ：13:00～13:10
2. 講演：13:10～14:30
3. 休憩：14:30～14:40
4. 質疑応答：14:40～15:45

講演

- 人と自然の共生の歴史
- 人里と鎮守の杜：日本人の宗教心
- 地球温暖化と生物多様性



セミナーの様子

講演の挨拶(岩槻邦男さん)

六甲山とは1959年に植物分類地理学会で来て以来の関わりがあります。あまり六甲山のことは知りませんが、六甲山の話所々に入れながら、人と自然の共生、生物多様性国家戦略について話をさせていただければと思います。



岩槻邦男さん

講演内容

1. 人と自然の共生の歴史

■原始人が自然破壊をはじめた

新石器時代、原始人は森林を伐開して農地をつくった。まさに自然破壊だといえる。

「里山の自然を守ろう」という言葉が使われる。里山は人為人工でつくってきたもので、自然破壊の残滓に他ならない。自然破壊の残滓の自然を守ろうという言葉は矛盾している。



人里・里山

「自然」は老子から来ている。ありのままの姿、「じねん」で、人為人工が及ばない様。言葉の定義から言えば、里山は自然ではない。

■里山は自然に生まれてきたもの

里山は誰かが決めてつくったものではない。人里のエネルギー源を賄うバックヤードとして、生活の中から自然に生まれてきた。二次林は生物多様性が高いので、山菜などを採り、小動物をハン卜することもできる。

日本では農地は国土の20%強しかなく、里山が20%強、奥山が50%強という利用のされ方になっている。明治時代まで、日本では大型哺乳類は1種も絶滅していない。

■エネルギー革命で里山が放棄された

60年代になってエネルギー革命が起き、薪炭材を使わなくなった結果、里山が放棄された。それまで奥山で生きてきた野生生物が、人のいない里山に進出してきて、更に人里に出てくるように

なった。昨年は5000頭のクマが射殺された。人里・里山・奥山のゾーニングが乱れつつある。

■ゾーニングの概念はユネスコの概念と同じ

ユネスコで60年代に生物圏保存地域という概念をつくった。自然保護の核心地域と人の居住地域があって、その間にはバッファゾーンを置くという考え方だった。奥山はまさに核心地域であり、人里という居住地域を持って、その間に里山という緩衝地域を置いている。現代の科学者が考えたことは、日本では万葉集の時代にはすでに確立していた。

日本では本州の最北端から琉球列島まで、人里・里山・奥山のゾーニングが開発されている。きわめてユニークなコンセプトだといえる。

2. 人里と鎮守の杜：日本人の宗教心

■鎮守の杜は神様の居場所

日本の人里ではどんな小さな集落でも氏神様を祀っている。氏神様は鎮守の杜で覆われている。鎮守の杜とは奥山の依り代。宗教施設が森で覆われているのは日本だけしかない。

「八百万の神」の「八百万」は無限ということ。自然そのものが神様に置き換えられる。神様の住み家であった奥山を伐開して農地をつくった。日本人は開発に対する申し訳なさを共通に持った。

日本は豊かな自然に恵まれる一方、災害列島でもある。恵みと恐ろしさへの畏敬の念を両方持った。



鎮守の杜

■英語では自然破壊は必ずしも悪ではない

「自然」は英語では nature だとされている。nature は wild と同義語。wild (荒地) とは demon (悪魔) の住むところ。自然から悪魔を追い出して、資源を有効に活用する。だから自然破壊は必ずしも悪ではない。

欧米では自然は資源のもとだという理念がある。資源がなくならないようにするのが自然保護で、日本のように畏敬すべき場所を保護するという考え方とは違う。

■人と自然の共生は日本人のバックグラウンドがあればこそ

「人と自然の共生」という言葉が花博でシボリックに使われて以降、日本中に流行している。日本人は、この言葉の説明を受けなくても理解できる。これは日本人のバックグラウンドがあつてこそ。欧米人に伝えることが地球の継続性にとって大事だが、欧米では自然は資源のもとだと考えられているのでなかなか理解されない。

3. 地球温暖化と生物多様性

■温暖化は紛争の元になる

92年のリオデジャネイロの環境サミットで気候変動枠組み条約と生物多様性条約の2つの国際条約ができた。気候変動の方は、地球温暖化で分かりやすくなり、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）とゴア元副大統領のノーベル平和賞で一躍有名になった。

IPCCはCO₂の増加が人為的であり、増加が90%の確率で温暖化に関係していると証明した。温暖化で地球環境が破壊されると、資源争奪が起こり、紛争になる。それを未然に防いだという意味で、ノーベル平和賞を受賞した。ノーベル賞は戦略がうまい。IPCCだけでなくゴア氏に授賞することで一躍注目を集めさせた。

■温暖化の本当の問題は生物多様性への影響

温暖化になったら本当に困るだろうか？東京が水没するのは堤防で防ぐことができる。ロシアの人なら、温暖化でシベリアの凍土が穀倉地帯になってかえって喜ぶことになるかもしれない。

一番の問題は地球温暖化が、生物多様性に壊滅的な影響を与えることだ。温暖化と生物多様性の関連性はまだ証明されていない。生物多様性に関する全ての情報の電子化が試みられているが、まだデータ量が少なく、中学生の夏休みのレポート程度しか書けない。生物多様性でノーベル賞が取れるのはしばらく先になるだろう。

質疑応答

自然のために個人としてできることは？：まず自分の中でどう生かすかを考えてください。一番簡単にやれることは、思ったことを家族や友達に広げること。温暖化が怖いと思ったら、怖さを伝えるのが一番簡単なこと。

六甲山麓の市民は六甲山とどのように関わっていくべき？：六甲山は山間地帯の里山とは違い、都市の住民に最も近い場所にあり、都市と密接に結びついている。里山は人々の生活からつくられてきた。六甲山麓の250万の市民がこの場所を、現代風にどう活用するか提言していくべきだと思う。

まとめ(岩槻さん)

ノーベル賞受賞者のマータイさんが日本語の「もったいない」を世界に提唱しています。現在の「もったいない」はケチケチ主義のことを言う。本来は「もったい」をなくすること。「もったい」とは実体のことであり、自然物そのものが「もったい」になります。八百万の神の持ち物である「もったい」を無駄にするような不遜なことではないというのが本来の「もったいない」でした。本当に国際語として理解してもらうには、日本的な自然観と一緒に広げていってほしいと思います。

「活用する会」のパンフレットにも「六甲山をたのしまなくちゃもったいない」というキャッチフレーズがあります。六甲山というこんなに恵まれた地形、生物の多様性があるのに活用しないのは、神様に対してもったいないということではないでしょうか。

事務局より

環境問題が叫ばれる現在、日本人の里山のコンセプトが地球の持続性にとって重要なことだと知りました。最後にはキャッチフレーズにも触れていただきました。六甲山の豊かな環境を活用することは、地球環境問題にも貢献することだと思いを新たにしました。

◆参考・配布資料など

- ・スライド「六甲山で生き物と出会う」、レジュメ
- ・『温暖化と生物多様性』（岩槻邦男・堂本暁子編、築地書館、2008）



兵庫県立人と自然の博物館 館長
岩槻 邦男 いわつき くに
〒669-1546 三田市弥生が丘6丁目
電話：079-559-2001(代) FAX：079-559-2007
E-mail: iwatsuki@hitohaku.jp

◆参加者の声～アンケートより～

- ・ゾーニングとしての里山は日本人の心であった気がする。
- ・先生のお話を聞ける滅多にないチャンス。楽しく参加できた。

◆参加者：32名（50音順・敬称略）

池田 螢俊	泉 美代子	井上 佳幸	今西 淳二
岩木美寿雄	岩槻 邦男	上田 均	大垣 廣司
岡 敏明	岡谷 恒雄	兼貞 力	君野 豊子
香西 直樹	小坂 忠之	小林 幸子	小野 信治
七目木修一	高橋 圭子	谷口 清	伊達奈保子
佃 敬之佑	辻 吉彦	土井口賢次	堂馬 英二
堂馬 佑太	長谷川友彦	伴 芙美香	福永 一登
藤井宏一郎	前畑 晃也	増井 啓治	増田 知子